

『旅に取り組むにあたって』

尾崎 徹

私達 OB 合唱団が旅に取り組むことは無理なのでしょうか。きっとそんなはずはないでしょう。何故ならここで問い掛けている旅とはそれぞれ一人一人の心のなかに刻み込まれた人生としての旅だからです。若者として、中高年として旅する想があればきっとその音楽に共感するでしょう。それぞれがこのテーマを自分なりのシナリオで自分の物語を構成していけばよいのです。

因みに私はこのように想いをはせました。… ‘これは一人の若者の世界にひとつしかないラブストーリー’ であると…。若者はかつて愛する人と別れなければならない止むを得ない事情のため、今はもう過去の話としてその人と離れ数年の月日を経ていた。ただ昔の熱い想いを忘れられるはずもなくいつか機会があれば思い出のその地を訪ね再会を果たしたいと思っていた。ふとある時草原のクサヒバリの鳴く声を聴いているとあの過去の想いが突然沸き上がり、自分をどうしてもあの旅に誘う声がどこからともなくしかしはつきりと聞こえてきた。それに誘われ旅をする決心をしたのだった。

急ぐ旅でもなく旅先で出会ったお爺さんの話やお地蔵さん、一本杉たちが暖かく迎え接してくれた。遠くを見るときれいな山並みが改めて旅の喜びを教えてくれようとしている… 本当の目的を忘れてしまうくらいに旅はそれぞれの鮮やかな姿で旅人を引き込む…。

やがて渚に辿り着いた若者はかつてのあの切なくて情熱的な愛に目覚めようとしていた、望んでいたあのときに還り、二人が甘い憂いを込めた渚、まさに逢おうとしていたあの人が、… 海原を見ていると二人の愛が陽炎のように、思い出の中に鮮やかに現れ、消えていった。

旅を続けたが一層道程は厳しくなっていく、一晩中歩みを進めど、夜空の彼方に寒々とした星屑しか見えない。でも・・・あの人がいた二人で愛を誓ったあの地にやっと辿り着いた。知らず知らず、あの時遠く地平線を見た高台に来ていた。でも、逢いたいその人は、渚で好きだということも告げられなかったあの人は、もう

いない。疲れきってしまった、もうこれで旅はおしまいと心に決めて… どれ程の月日が経っただろう、若者はすでに伴侶を得ていた。あの旅の悲しみ、辛さを乗り越え、充分に癒えていた若者は再び旅に出る。今はもう 1 人ではない、我らの心は希望に繋がっているからだ。行こう再び！あの憧れになわれて！

少し脚色し過ぎかも知れませんが、イメージを膨らせればまた違ったストーリーも浮かぶはずです。要はどれだけこの組曲に気持ちが込められるかです。主人公はもちろん、昔のあなたであったり、架空の青年であったり、そのようなことはどう考えても構わない。旅のメロディーに乗せて皆さんがいかにイメージとしての視野を広げて歌うかです。さあ、旅に想いをはせてください。一緒に歌いましょう。